インターネット依存傾向とネットいじめ経験に関する予備調査の報告

—全国の大学生世代への調査結果から—

○田代光輝 (TASHIRO Mitsuteru)

Keywords : インターネット依存 ネットいじめ インタネットゲーム スマートフォン

1 目的

本研究の目的は、インターネット（以下：ネット）への依存傾向と、ネットいじめの加害・被害の経験（以下：ネットいじめ経験）の関係を明らかにするための、本格的な調査の予備調査の分析結果である。これまでの研究では、ネット依存傾向とネットいじめ経験の関係については十分に明らかにされていなかった。また、AIを含んだ情報技術の発達により、未成年の利用するサービスにも大きな変化があることが予測される。さらに、いじめというセンシティブな体験に対する調査であるため、心理的なケアについても検証を行う必要がある。そのため、本格的な調査の前に、設問の内容や、選択肢の内容などを精査、心理的ケアの効果を検証する必要があり、予備調査を行った。

2 方法

本格的な調査の前の予備的な調査として全国の大学生世代 300 名に対して、ネット依存傾向や、ネットいじめ経験について、高校生の頃の体験などを調査した。併せて、先行研究から導き出されたいくつかの仮説を検証するための設問や心理的ケアの内容を設けて実施した。

3 結果

調査・分析の結果、ネットいじめ経験とネット依存傾向に正の相関がみられた。一方で、スマートフォンの利用時間と、ネットいじめ経験やネット依存傾向は、先行研究では、正の相関があったが、予備調査では負の相関がみられた。一方で、ゲーム時間とは正の相関となった。これは、スマートフォンの利用とパソコンやゲーム機の利用の、状況の違いと推察される。また、リテラシー教育の受講経験や、フィルタリングの設置状況は、ネットいじめ経験やネット依存傾向とは無相関であったが、家庭内ルールを守っているとネットいじめやネット依存傾向は低い傾向があった。

4 結論

予備調査の結果から、ネットの利用時間をスマートフォン利用時間だけではなく、パソコンやゲーム機などの利用時間も調査する必要性が出てきた。また、ネットサービスのプラットフォームは、LINE、X（旧 Twitter）、Instagram、YouTube、ネットゲーム、などの先行研究でも利用されているものに加え、BeReal、TikTok などの新しいサービスなども加える必要性がでてきた。

尚、予備調査の結果を受けて、2025 年度に本調査を行う予定である。発表時に本調査の一部分析も交える予定である。

【主要参考文献】

菊地他「一般大学生における発達障害傾向がインターネット依存傾向に与える効果」CAMPUS HEALTH, 55 (2), 162-167, 2018

Furukawa, T. A., Kawakami, N., Saitoh, M., et al. (2008). The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. *International Journal of Methods in Psychiatric Research*, 17, 152-158